



Title	大学生の生活・健康に関する研究 : ヘルスサービスにおける内的(教育的)要因の充実について
Author(s)	下村, 義夫; 江口, 篤寿
Citation	北海道教育大学紀要. 第二部. C, 家庭・養護・体育編, 32(1): 23-32
Issue Date	1981-09
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/6612
Rights	

大学生の生活・健康に関する研究
——ヘルスサービスにおける内的（教育的）
要因の充実について——

下村義夫・江口篤寿*

北海道教育大学旭川分校養護教育研究室

*筑波大学体育科学系

An Investigation on Students' Life and Health
—A View of the Internal (Educational)
Factors in a More Perfect Health Service—

Yoshio SHIMOMURA and Atsushisa EGUCHI*

Department of School Health, Asahigawa College, Hokkaido University of Education,
Asahigawa 070

* Institute of Health and Sport Science, The University of Tsukuba,
Sakuramura 305

Abstract

In order to make student health services effective, it is necessary to find out what the need and demands of students are, and on the basis of this, to make a mature plan. Starting from this premise we shall try in the present paper, to point out that serious problems are derived from the three types of student dwellings, i. e., dormitories, boarding houses and their own homes.

The subjects of the survey are 600 students at three universities in the Kanto Area. we utilize the questionnaire of the BIOS survey.

The results obtained from the data are as follows;

- 1). Students living in their own homes are more satisfied than the other two classes with regard to their type of dwelling.
- 2). The principal cause for dissatisfaction is the nature of the 'host' eating habits.
- 3). Students' own homes are more satisfactory than the other two types with regard to eating habits.
- 4). The feeling of satisfaction with eating habits is more related to the question of breakfast than to that of other meals.

- 5). There are differences in the way free time is used among the three classes of student.
- 6). With regard to drinking and addiction, which has become an international problem, there is agreement with the general results of the same generation in other countries, while there is no difference among three class of students.

I. 諸言

我が国における大学・短期大学等の高等教育機関への進学率は、昭和53年度の報告¹²⁾では38.4%を示しており、世界でも有数の進学率の高い国となっている。それに伴って、高等教育機関において、学生を一過性の通過集団として捉えるのではなく、彼らのライフステージにおける特徴を把握した、彼らに即した健康管理・健康教育を実施していくことが要求され、重視されてきている。

WHO¹⁷⁾は、“大学生が新しい感情的並びに社会的経験をする機会とそれに伴う責任をもちながら、また比較的自由なために独自の特質と問題を包含しているながら、学生を一過性の通過集団として扱われ易いため、健康が無視されがちである……”として、学生の在学中における健康・福祉・学問研究の進歩に関連した特別のサービスを考慮することを指摘している。しかし、これらの指摘されたサービスを現実化していくためには、施設の整備等の外的要因の充実と共に、健康へのニーズや興味の明確化、それらに対する情報提供、さらに健康教育という内的要因の充実が重要な課題とされる。なかでも、後者の充実においては、その集団の健康に関する保健知識の程度、興味および意識水準の把握が必須とされる。従って、内的要因を充実していくためには、具体的な学生の日常生活における問題を明らかにすることが、第一段階と思われる。即ち、学生が大学生活を過ごしていく上で、どのようなことに不満や要求をもち、それらがどの程度生活に支障をきたしているかを、明らかにしなければならない。そして、このような段階を経て、はじめて内的・外的要因の充実・整備が可能とされよう。

これまで、大学生の生活・健康の実態についての調査研究としては、大学生を含む青少年を対象とした生活行動や意識について、大規模で、しかも国際的見地からの調査¹³⁾が実施されており、青少年に関する施策の樹立に資している。また、大学生活における大学教育の内容や学生へのサービスに関する施策等、環境条件の充足度を検討した報告⁹⁾もみられる。さらに、大学生の健康に焦点を合わせた、健康障害の実態²⁾、肥満学生の実態¹¹⁾、精神的不適応学生の実態¹⁴⁾等の調査研究が行われている。しかし、症状を伴う健康障害に至らないまでも、健康面に大きな影響を及ぼしていたり、不満感を規定していると考えられる日常生活に起因する具体的な問題、例えば生活様式に関する問題について、先述の視点から検討した報告は少ない。そこで、本研究は、我が国においてもBIO S調査¹⁵⁾が実施され、大学生の生活・環境・健康に関する実態を把握する機会を得たので、調査から指摘される学生の大学教育そのものに対する不満やニーズ²⁾、並びに日常生活における問題を明らかにし、内的要因を充実していく上での一資料となることを目的としている。

特に、本報では、生活意識を考える際、最も重要な項目には、“生活の満足感”および“階層帰属”とされ、なかでも“住宅に関する満足度”は説明変数寄与率が最も大きいこと⁴⁾、さらに自室で行われていることから、門田等^{6,7)}にみられる住居環境に起因する問題に焦点を合わせ、検討を行った。

II. 調査方法

調査対象者は、関東地域の三大学の大学生計 600 名（男 410 名，女 190 名）である。調査時期は、昭和 52 年 1～3 月である。また、調査は、集合調査法により配布・回収した。

調査内容は、BIOS 調査票における選択法形式（一部自由記述，順位法）からなる次の項目の解析である（注 1 参照）。

〔A〕生活・環境調査

3. 生活様式

- ・住居環境に関する項目
- ・食生活に関する項目
- ・嗜好傾向に関する項目
- ・余暇・サークル活動に関する項目
- ・経済的背景に関する項目

ただし、解析にあたって、欠損値・不完全値については、池田の方法¹⁾によって、有効性を考慮して統計処理を行った。

なお、データの統計処理は、プログラム・パッケージ・SPSS を用い、筑波大学型計算機 ACOS 800 II で行った。

III. 結果

1. 住居環境の割合

Table 1 は、調査対象学生の住居環境の割合を示してある。住居環境の割合は、学生寮，下宿・アパート，自宅と、ほぼ 30% 程度であった。

Table 1 The proportion of types of students' dwelling

Types of dwelling	Numbers of students	
	N	%
Dormitory	181	30.2
Boarding house	205	34.2
Own home	185	30.8
Other or no answer	29	4.8
Total	600	100.0

2. 住居環境とその不満感

Table 2-1 は、住居に関する不満感を住居環境別に示してある。「不満」と回答した学生は、住居環境の違いにより、有意 ($P < .01$) に相違し、自宅が 55 名 (29.9%) と最も少ない。逆に他の二者は、約半数近くの学生が現在の住居環境に不満を示している。

Table 2-1 Correlation between students' dwelling and dissatisfaction for dwelling.

Dwelling type	Feeling		Total
	Satisfied	unsatisfied	
Dormitory	102 (56.7)	78 (43.3)	180 (100.0)
Boarding house	102 (50.2)	101 (49.8)	203 (100.0)
Own house	129 (70.1)	55 (29.9)	184 (100.0)
Total	333 (58.7)	234 (41.3)	567 (100.0)

$X^2 = 16.7$ $p < .01$ (): %

Table 2-2 は、住居環境の不満感に関連すると考えられる諸因子——通学時間、日常の多忙さ、食生活の充足感、情緒感、家族との関係等——を比較してある。クラマー係数 (Cr) から相関をみると、食生活に関する事項に相関がみられ (Cr = .209)、次に家族との関係である。即ち、住居に関する不満感、他の事項に比較して、食生活に関する事項に関連を示している。そこで、次に食生活に関する事項について、住居環境別の状況を示す。

Table 2-2 Correlation between dissatisfaction for dwelling and 5 factors

Factor	Category	Feeling for dwelling		Total	Cramer's coefficient
		satisfied	unsatisfied		
time for going to school	less than 1 hour	286 (57.9)	208 (42.1)	494 (100.0)	0.078
	more than 1 hour	63 (62.4)	38 (37.6)	101 (100.0)	
satisfied in eating	yes	288 ** (64.7)	157 (35.3)	445 (100.0)	0.209
	no	62 (41.1)	89 (58.9)	151 (100.0)	
feeling always busy a day	yes	135 (59.0)	94 (41.0)	229 (100.0)	0.001
	no	213 (58.4)	152 (41.6)	365 (100.0)	
feeling always low	yes	236 ** (56.1)	185 (43.9)	421 (100.0)	0.097
	no	110 (64.3)	61 (35.7)	171 (100.0)	
relationship with your parents	open	319 ** (61.8)	197 (38.2)	516 (100.0)	0.166
	distant	26 (36.6)	45 (63.4)	71 (100.0)	
	no contact	3 (60.0)	2 (40.0)	5 (100.0)	

* $p < .05$ ** $p < .01$ (): %

3. 住居環境と食生活の関連

Table 3-1 は、住居環境と朝食の摂取状況を示してある。朝食の摂取状況は、住居環境の違いにより有意 ($P < .01$) に相違し、学生寮、下宿・アパートでは、「朝食を摂取している」と回答した学生が、それぞれ 34 名 (26.0%)、53 名 (38.7%) であるのに対して、自宅では 133 名 (76.0%) と最も多い。

Table 3-1 Correlation between students' dwelling and conditions of taking breakfast.

Dwelling type	taking breakfast		Total
	yes	no	
Dormitory	34 (26.0)	97 (74.0)	131 (100.0)
Boarding house	53 (38.7)	84 (61.3)	137 (100.0)
Own house	133 (76.0)	42 (24.0)	175 (100.0)
Total	220 (49.7)	223 (50.3)	443 (100.0)

$$X^2 = 84.62 \quad p < .01 \quad () : \%$$

Table 3-2 は、住居環境とふだんの食事における量的充足感と質的充足感について示してある。食事の量的充足感は、学生寮 125 名 (69.4%)、下宿・アパート 133 名 (65.8%) と約 70% 近くの学生が「ほぼ満足している」と回答している。これらに対し、自宅では 165 名 (89.7%) と二者に比べ最も多く、ふだんの食事の量的充足感においても、住居環境の違いによって有意 ($P < .01$) に相違している。また、ふだんの食事の主に栄養面に関する主観的判断、即ち質的充足感については、住居環境の違いによる相違が量的充足感の状況よりも大きく、「栄養面で充実している」と回答した学生が、学生寮 100 名 (55.9%)、下宿・アパート 109 名 (53.7%) に比べ、自宅が 161 名 (87.0%) と最も多く、有意 ($P < .01$) に相違している。さらに、男女差をみると、食事の量的充足感のみ相違が認められる。「食事を十分にとっている」と回答した学生は、男子では住居環境の違いにより有意 ($P < .01$) な相違があり、女子では、学生寮 65 名 (81.3%)、下宿・アパート 51 名 (75.0%)、自宅 28 名 (87.5%) と同様な傾向を示しているが、有意な相違は認められない。

Table 3-2 Correlation between students' dwelling and satisfaction about diet.

about diet dwelling type	Sex	quantity ¹⁾		Total	quality ²⁾		Total
		satisfied	unsatisfied		satisfied	unsatisfied	
Dormitory	M	125(69.4)	55(30.6)	180(100)	100(55.9)	79(44.1)	179(100)
	F	65(81.9)	15(18.7)	80(100)	59(73.7)	21(26.4)	80(100)
Boarding house	M	133(65.8)	69(34.2)	202(100)	109(53.7)	94(46.3)	203(100)
	F	51(75.0)	17(25.0)	68(100)	37(54.4)	31(45.6)	68(100)
Own home	M	165(89.7)	19(10.3)	184(100)	161(87.0)	24(13.0)	185(100)
	F	28(87.5)	4(12.5)	32(100)	30(93.8)	2(6.2)	32(100)

1) $X^2 = 33.64 \quad p < .01$ 2) $X^2 = 57.60 \quad p < .01$ 3) $X^2 = 39.92 \quad p < .01$
M : Male F : Female () : %

Table 3-3は、朝食の摂取状況、ふだんの食事の量的充足感、質的充足感および他の生活関連因子との関連を示してある。食事の量的充足感と質的充足感が高い相関 (Cr = .697) を示し、ふだんの食事に対して、量的に充足していると回答した学生は、質的にも充足感をもっていることを示している。また、朝食の摂取状況と食事の量的充足感 (Cr = .340)、質的充足感 (Cr = .378) も高い相関を示しており、朝食の摂取有無がふだんの食事の充足感と関連を示している。

Table 3-3 Correlation matrix of 12 factors

(1) satisfied own dwelling	(1)										
(2) time for going to school		(2)									
(3) sleeping hour			(3)								
(4) feeling best condition				(4)							
(5) feeling tired				.153	(5)						
(6) drinking						(6)					
(7) taking tranpuillizer							(7)				
(8) taking breakfast								(8)			
(9) eating in quantity								.340	(9)		
(10) eating in quality								.378	.697	(10)	
(11) feeling always busy											(11)
(12) parents' support											(12)

Coefficient scores less than 0.150 were not shown in this table.

4. 住居環境とその他の要因との関連

Table 4は、住居環境と食生活以外の生活因子との関連を示してある。住居環境の違いによって、有意な相違が認められる因子は、通学時間、スポーツ活動状況、日刊新聞購読状況、テレビ視聴状況、アルバイト実施状況である。特に、通学時間は、住居環境に高い相関を示している (Cr = .544)。即ち、学生寮、下宿・アパートでは、90%以上の学生が1時間以内の通学時間 (片道) であるのに対して、自宅は「1時間～1時間半」31.4%、「1時間半以上」16.8%と通学にかなりの時間を費やしている。しかし、スポーツ活動状況、日刊新聞購読状況、アルバイト実施状況では、自宅がそれぞれ「毎日またはしばしば実施している」78.2%、「毎日またはしばしば読んでいる」97.3%、「ほとんど毎日またはときどき見る」91.3%、「アルバイトをしている」75.3%と、他の二者に比べ最も多く、自由時間の利用にも若干違いがあることを示している。

IV. 考察

大学外での生活の中心となっている住居環境に対する不満有訴率は、学生寮、下宿・アパート、自宅の順に多く、自宅が三者の中で最も少なく、良好な状況を示唆する結果を得た。住居環境に関する不満感を形成する因子は、複雑多岐であると思われるが、なかでも食生活に関する事項に大きなウェイトを占めていることが示唆された。このことは、住居環境が生活意識における重要な因子であると同様に、食生活に関する事項が、多くの健康事象と密接な関連をもち、健康維持に必須な因子であるとする豊川等の一連の報告^{5, 15, 16}等から、効果的なヘルスサービスを実施する上での、内的因子要因の充実にとって、重要な事項と思われる。

Table 4 Correlation between students' dwelling and their daily action.

Factor	Category	Dormitory	Boarding house	Our home	Chisquare score	Cramer's coefficient
time for going to school	— .5hr	178(98.9)	106(52.2)	30(16.2)	336.76 **	0.544
	.5hr — 1hr	2(1.1)	88(43.3)	66(35.7)		
	1hr — 1.5hr	0(0.0)	9(4.4)	58(31.4)		
	1.5hr —	0(0.0)	0(0.0)	31(16.8)		
sleeping hour	yes	135(74.6)	163(81.8)	146(78.9)	2.44	0.066
	no	46(25.4)	38(18.9)	39(21.1)		
feeling best condition	morning	38(21.2)	46(22.7)	31(16.9)	2.75	0.049
	afternoon	62(34.6)	69(34.0)	73(39.9)		
	evening	79(44.1)	88(43.3)	79(43.2)		
feeling always low	yes	137(76.1)	147(72.4)	122(66.3)	4.406	0.088
	no	43(23.9)	56(27.6)	62(33.7)		
feeling tired	yes	83(46.4)	102(50.0)	91(50.0)	0.645	0.034
	no	96(53.6)	102(50.0)	91(50.0)		
smoking	yes	65(32.5)	80(40.0)	55(27.5)	4.184	0.086
	no	114(31.5)	120(33.1)	128(35.1)		
drinking	never	14(7.7)	8(3.9)	6(3.2)	7.713	0.082
	rarely	90(49.7)	104(51.0)	90(48.6)		
	occasionally	70(38.7)	77(37.7)	79(42.7)		
	often	6(3.3)	11(5.4)	7(3.8)		
	every day	1(0.6)	4(2.0)	3(1.6)		
taking tranquilizer	never	173(95.6)	196(96.6)	174(95.1)	4.097	0.060
	rarely	5(2.8)	6(3.0)	8(4.4)		
	fairly often	2(1.1)	1(0.5)	0(0.0)		
	every day	1(0.6)	0(0.0)	1(0.5)		
exercise	daily	19(10.7)	12(6.0)	32(17.5)	28.75 **	0.160
	often	98(55.4)	98(49.0)	111(60.7)		
	rarely	51(28.8)	76(38.0)	34(18.6)		
	never	9(5.1)	14(7.0)	6(3.3)		
artistic activity	daily	26(14.4)	34(16.7)	33(17.8)	10.81	0.097
	often	76(42.0)	71(35.0)	66(35.7)		
	rarely	47(26.0)	44(21.7)	32(17.3)		
	never	32(17.7)	54(26.6)	54(29.2)		
reading a daily paper	very often	108(59.7)	142(69.0)	158(85.4)	37.36 **	0.181
	great events	44(24.3)	47(23.0)	22(11.9)		
	rarely	20(11.0)	9(4.4)	4(2.2)		
	never	9(5.0)	6(2.9)	1(0.5)		
reading magazines	weekly	70(38.7)	67(32.7)	85(46.2)	18.07 **	0.126
	fairly often	82(45.3)	82(40.0)	58(31.5)		
	rarely	25(13.8)	43(21.0)	27(14.7)		
	never	4(2.2)	13(6.3)	14(7.6)		
feeling always busy	yes	66(36.5)	73(35.8)	79(42.9)	2.48	0.066
	no	115(63.5)	131(64.2)	105(57.1)		
watching television	very often	46(25.6)	66(32.2)	137(74.5)	119.57 **	0.324
	great events	42(23.3)	47(22.9)	31(16.8)		
	rarely	56(31.1)	54(26.3)	15(8.2)		
	never	36(20.0)	38(18.5)	1(0.5)		
doing a side job	yes	87(48.1)	130(63.7)	137(75.3)	28.87 **	0.226
	no	94(51.9)	74(36.3)	45(24.3)		

() : % ** : $p < .01$

食生活に関する主観的判断による本結果では、朝食の摂取状況、ふだんの食事の量的充足感において、自宅が他の住居環境より良好な状況にあることが明らかにされた。また、朝食の摂取状況、食事の質的充足感については、男女差がみられないが、食事の量的充足感に差が認められた。このことは、男子では、食事に関する充足感が質・量共に住居環境に大きく関連していることが考えられる。一方、女子は、量的な充足感カバーできて、質的な充足感までカバーできず、住居環境の不満感を形成する一因となっているように思われる。

朝食の摂取状況についても、自宅が最も良好な状態であるとする結果が得られたが、門田⁷⁾、中林⁸⁾等の報告とは、摂取有無の頻度、および傾向とも異なる様相を示している。

従って、本結果が、大学生の朝食摂取状況における一般的な傾向とは、一概に示すことができない。故に、今後同様な調査を実施する際には、学生寮や下宿等について、食事の摂取様式を考慮した住居環境の分類を、詳細に検討する必要がある。

また、朝食の摂取状況は、食生活に関する事項全般に、高い相関を示していることから、住居環境に対する意識に大きな影響を及ぼす、最も良い指標かと思われる。即ち、朝食の摂取状況が良好であることは、ふだんの食事状況もある程度良好と推測され、食生活に関する意識に影響を与える。そして、朝食の摂取状況をはじめ、食生活に関する意識が、住居環境に対する不満感の形成に、大きなエイトを占めていると考えられる。ただし、栄養調査等による具体的な資料を得ていないので、主観的な意識レベルが実際の栄養摂取量と、どのような関連をもっているのかは、今後の課題とされる。この点について、門田⁷⁾等は、大学入学以後、学生寮・下宿で生活する学生は、生活時間構造や生活条件の変化によって、食生活にも変化が生じ、特に朝食、夜食の摂取状況、質的状況が自宅通学者とは異なり、健康管理上、十分留意する必要があるとしている。しかし、ヘルスサービスの内的要因の充実を計るためには、先述した住居環境の分類上の問題や食生活に関する認識上の水準を、さらに明らかにする必要がある。

食生活以外の事項では、通学に最も時間を費やしている自宅が、スポーツ活動、アルバイトの実施等の活動において、むしろ他の住居環境より、実施率が高く、日常の自由時間、余暇活動においても、野村等の報告⁹⁾と同様に、住居環境の違いによる相違があるように思われ、生活意識になんらかの影響を及ぼしていることが示唆される。

また、世界的な傾向¹⁰⁾として、今後、我が国でも問題になると思われるアルコール中毒に関連して、飲酒習慣に関する事項については「ほとんど毎日飲む」5.8%、「ときどき飲む」39.9%であり、斉藤等の調査¹⁰⁾における20才台の飲酒分布と、同様な傾向を示している。さらに、精神安定剤や睡眠薬の使用については、「常用している」と回答した学生が1.0%とわずかであるが、飲酒習慣と共に、今後の動向が注目される。また、住居環境による相違は認められないが、同様な観点での追跡調査を行っていくことが、大学生の生活実態や生活意識を把握する上で、さらに有効性をもってくると思われる。

以上のことから、生活意識の中で、住宅満足感が大きな寄与率をもっていると考えられるが、大学生においては、住居環境そのものに対する不満感は、食生活に関する因子にある程度規定される傾向が考えられ、住宅そのものにウェイトをおく一般社会人とは、内容的に若干異なるように思われる。従って、効果的なヘルスサービスを実施していくための内的要因の一つとしては、まず食生活を中心とした情報の提供、および教育の必要性が指摘される。その際、具体的な食生活に関する学生の知識の程度、その水準に適応した情報、ならびに教育内容の精選が、重要な課題とされる。

即ち、Fig 1に示すような「生活・健康（例えば食生活）に関する学的体系」^④と「学生の生活・健康（例えば食生活）に関する知識の程度・認識の水準」^⑧との関連から、^⑧の水準に適応する「情

報や教育の内容」③が並行かつ有機的に検討され、さらに「指導・教育場面」④を通じて、修正精選されることが必要と思われる。そして、このような学生のライフスタイルの変容につながる内的要因の充実を推進し、ヘルスサービスにおけるソフトウェア面でのシステム化を計っていくことが、今後の基本的課題と考えられる。また、そのような内的要因の充実を検討する中で、施設の整備等の外的要因の充実が二次的に行われると思われる。

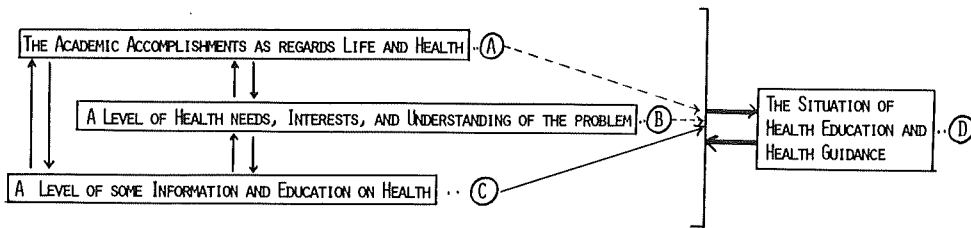


Fig. 1: An example of Internal (Educational) Factors in more perfect Health Service.

V. 要 約

大学生に対する効果的なヘルスサービスを実施していくためには、まず彼ら自身もっている不満や健康ニーズを明らかにして、それらに対応する施設の整備等に関する外的要因の充実ならびにライフスタイルの変容に関する内的要因の充実を計ることが重要である。

そこで、本報告は、生活意識における説明変数として、大きな寄与率を示す住居環境——学生寮、下宿・アパート、自宅——に着目し、そこから起因する問題を明らかにする中で、内的要因の充実を計る際の基礎資料を得ることを目的としている。

その結果、次のことが示唆された。ただし、解析内容は、BIOS 調査における生活・環境（生活様式）項目である。

- 1) 住居環境に関する不満有訴率は、自宅が最も少なく、一方、学生寮、下宿・アパートでは、約半数の学生が不満感をもっている。
- 2) 住居環境に関する不満感を形成する因子として食生活に関する事項において、自宅が学生寮、下宿・アパートの二者に比べ、意識面でより良好な状態にある。
- 4) ふだんの食事に対する充足感は、朝食の摂取状況と関連深い。
- 5) スポーツ活動等の余暇活動においても、若干住居環境の違いによる相違が認められた。
- 6) 世界的に問題になりつつあるアルコール中毒に関連する飲酒習慣ならびに精神安定剤、睡眠薬の使用について、大学生においても同世代と同様の使用傾向を示し、住居環境の違いによる相違は認められない。

以上のことから、大学生の住居環境に関する不満感は、食生活に関する因子に、最も関連していることが示唆され、特にヘルスサービスにおける内的要因の充実にとって、それらの因子について

の知識の程度、認識の水準を明らかにしながら、ライフスタイルの変容につながるようなソフトウェア面でのシステム化が今後の課題とされる。

最後に、BIOS 調査の実施にあたり、津田塾大学・村井孝子教授、東京大学・黒田善雄教授に御協力いただいた。両教授に心から感謝する。

注1) パリ大学ドブレ教授は、今日の大学問題を国際的視野から考えるべきものとして、学生の学業、体育、スポーツ・レクリエーション、保健・生活環境等に関する実態調査の実施を提唱した。BIOS 調査とは、この実態調査を云う。調査項目は、本報告の解析内容を含む生活・環境に関する 90 項目〔A〕と既往歴・遺伝関係を柱とする 100 項目〔B〕からなっている。

〔A〕 生活環境調査

1. 個人的状況 (10)
2. 大学での学業 (10)
3. 生活様式 (50)
4. 大学と社会 (20)

〔B〕 健康調査 (100) () : 項目数

注2) 大学・大学教育そのものに対する不満やニーズについては、雑誌「日本学校保健研究」に投稿を予定している。

文 献

1. 池田央, 1971, 統計調査のコンピューター解析, 東洋経済社, 東京, 35-38 頁
2. 加藤活大・佐藤裕造・戸田安士・伊藤章, 1976, 大学生の健康障害の実態, 学校保健研究, 18 : 442-445
3. 経済企画庁国民生活調査課, 1977, 日本人の教育観と職業観, 大蔵省印刷局, 94-168 頁
4. 国民生活センター, 1976, 生活意識に関する研究, 大蔵省印刷局, 30 頁
5. 丸井英二・豊川裕之, 1978, 食物摂取状況に関する地域的構造の方法論的研究, 日本公衛誌, 25 : 363-370
6. 門田新一郎, 1978, 学生の健康管理に関する研究 1, 学校保健研究, 20 : 243-245
7. 門田新一郎, 1978, 学生の健康管理に関する研究 2, 学校保健研究, 20 : 286-291
8. 中林瑛子・飯田澄子・島田照子, 1976, 健康生活の実態と認識, 関東学校保健学会講演集, 16-17
9. 野村和雄・柴若光昭・丹公雄・斎藤好司・大沢清二, 1973, 東大生の受診行動調査から, 学校保健研究, 15 : 473-479
10. 斎藤学, 1978, 首都圏一般人口における「大量飲酒者」と「問題飲酒者」, 公衆衛生, 42 : 309-317
11. 佐藤祐造・加藤活大・戸田安士・伊藤章, 1976, 肥満学生の健康管理に関する研究 (第 1 報), 学校保健研究, 18 : 487-492
12. 総理府青少年対策本部, 1979, 青少年白書, 大蔵省印刷局, 211-217
13. 総理府青少年対策本部, 1978, 世界青年意識調査, 大蔵省印刷局, 30-47
14. 末広晃二, 1978, 精神的不適応学生のスクリーニングの方法と実態に関する問題点, 学校保健研究, 20 : 337-342
15. 豊川裕之・三宅由子・伊藤雅治, 1975, わが国の食物摂取に関する研究, 日本公衛誌, 22 : 571-578
16. 豊川裕之, 1970, 食物消費にみられる地域格差に関する研究, 日本公衛誌, 17 : 15-21
17. WHO, 1966, "Fourteenth Report of the WHO Expert Committee on Professional and Technical Education of Medical and Auxilliary Personnel", Technical Report, No.320. (江口篤寿訳, 1973, 大学保健サービス, 学校保健研究, 27-38 頁)
18. WHO, 1975, Alcohol-A Growing Danger.WHO chonicle, 29 : 102-105